

## 会長挨拶

長谷部弘（日本村落研究学会会長）

2017年11月の村研大会（浜松市天竜区春野町）で、村研の会長職を引き継がせていただきました。池上前会長と同様、長年にわたってお世話になった村研への恩返しとして、会長職をお引き受けした次第です。もとより当該職責を果たすにふさわしい器だとは思っておりませんので、副会長の山本さん、事務局の原さん・吉野さん・土居さん、そしてそれぞれ大変な役割を分担してくださる理事の皆さんに助けて頂きながら、会員の皆さんによるアカデミアとしての学会活動を、安定して運営する仕事に取り組んでいければと願っています。

二年間の任期を、歴代の会長方の働きに倣いつつ務めさせていただくつもりです。幸いにも、前会長が二年間にわたる着実な学会運営によって大きな成果をあげてくださったので、その蓄積と改善成果を引き継ぎながら、研究会と大会を通じて会員の皆さんの研究成果の公開と相互研鑽の活動をお支えし、年報・ジャーナルの編集・発刊を通じて質の高い研究成果の発信と社会的還元尽力し、学界全体としての研究水準向上に資するための運営を行っていきたいと思っています。

みなさんもお存じのように、村研の学会運営にあたっては幾つかの年来の課題の存在を意識せざるをえません。まず、大会のテーマセッションを踏まえた研究年報の編集発刊の事業に関しては、すでに年報編集委員会と研究委員会の円滑な運営が実現されていますが、他学会と同様、村研の年報発刊においてもまた市場性の問題が問われざるを得ません。これは、私達の村落社会研究自体が持つ対社会性および研究成果の社会還元方法の学界的スキルアップの問題でもあります。アカデミアとしての立ち位置を崩すことなく、「売れる本」の企画を工夫する、という行為につきるわけですが、会員の皆さんの御意見を頂戴しつつ、新たなテーマの開発を試みて行きたいと考えています。さらに、ジャーナルの定期発刊の実現という課題があります。近年、日本の大学全体がおしなべて研究予算の削減、大学行政・教育業務負担の増大といった研究環境の悪化に直面しつつあり、大学院生をも含む若手研究者層のみならず、大学教員を多く含む村研会員全体の研究活動に多大なる重圧を与えつつあります。おそらくはその影響によって、現在村研ジャーナルは投稿論文数の激減という事態に直面しており、定期発刊に困難が生じつつあります。他の学会でも同様な事態を経験していますので、あるいは日本のアカデミアの体力が低下しつつあるのかもしれませんが、村研理事会としては、このような事態を正面から課題として受け止め、会員の皆さんの御協力を得つつ、その打開策を講じていかなければなりません。ほかにも、インタ

ーネットを利用した研究成果発信や村研通信配信、会員の開催する研究会情報や研究成果公開情報のサポート、会員相互のコミュニケーションの円滑化を実現し、村研としての対外発信力の強化に努めていきたいと考えています。また、国際的な研究成果発信の文脈で、引き続きアジア農村社会学会（ARSA）や国際農村社会学会（IRSA）等国际学会での会員の研究成果発信活動をサポートする体制を強化していきたいと考えています。

学会運営を支える物質的基礎としての学会財政の問題があります。この問題の本質は、会員のみなさんに定められた会費をきちんと納めて頂く、ということによって解決しうるシンプルなものなのですが、実際にはその実現がなかなか難しく、村研の積年の課題となり続けてきました。そのため、学会事務の活動はもとより理事会運営に際してさえ、理事の皆さんの「手弁当」での働きをお願いしなければならない実情があります。ご承知のように、前会長時代の二年間でようやく「瞬間的な黒字化」が実現したわけですが、会費未納入による構造的な赤字基調は払拭できておりません。会員の皆さんの御協力をお願いできればありがたく存じます。

今期理事会の皆さんは、村研の置かれている状況を十分に理解してくださって、村研運営のために尽力を惜しまずに働いてくださろうとしています。まだ自覚していない問題や課題、また新たに生じてくる課題や問題もあるでしょうが、村落社会の研究を進めていくために、会員の皆さんが活動しやすい舞台装置を整え、改善し、研究活動全体が発展するよう、理事の皆さんと共に努力したいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。